吉田　もう少し進んで言ふと、日本人が漢字を使ってゐるのが、ひとつの日本的なものの考へ方といふ風なものにもプラスになってゐるし、独創的な、外(ほか)の国とはまた違った特色といふのを発揮するであらうといふ風なことになるわけですが、漢字の中にはやはり東洋的な精神みたいなものが自然に入って来るので、別にことさら東洋精神とか何とかいふことよりも、やはり漢字を通してさういふ味はひみたいなものを与へて行くことの方が基本だといふお考へなんですか。

石井　漢字の持ってゐるいろいろな東洋的な思想、さういったものも大事ですけれども、現代の科学的なものでも何でも、書かれたものを吸収する力において、漢字と仮名(かな)をうまく使った表記といふものは、世界独特ですね。私は中国のものをやってゐますから感じるんですけれども、漢字ばかり並んだものは読みにくくて仕様(しやう)がない。そして実に読み取りにくいんですね。誤解も非常に生まれやすいんです。

ところが、漢字、仮名(かな)まじり文といふのは、漢字と仮名とが実にうまく配合されてゐまして、パッと見て正しく読み取りやすい。さういふ点では、先年チョムスキー氏が来日したときに、「私は日本語については十分な知識を持たないので、自信を持っては言へないけれども、漢字、仮名混り文といふのは、世界でもっとも能率的な表記方式なのかも知れない」といふ発言をしたのを知りまして、まさに我が意を得たりと思ひました。

吉田　漢字、仮名まじり文といふのが大変能率的なのは、何か慣れてゐるせゐか私もさういふ気がするわけですけれども、しかし、それと同時に教育といふのが最近能率的になり過ぎてゐて、流行性みたいなものばかりで評価される。教育といふのはさういふ面でないものもあるんではないかといふ問題が出てゐるわけですけれども、先生自身は自分の思想とか、さういふものの寄りどころはどういふところに求めますか。

石井　昔からの古典を最初から大事にする。最初子供たちに与へる文章の中にも、長い間日本人を育てて来た、さう言ったもの、定評あるものを早くから与へるといふことが私は大事だと思ってゐるんです。仮にその時には全く解(わか)らなくてもいい、とさへ私は思ひます。

例へば有名な論語などは、いつの時代にも人間の心構へとして、

支へになるといふ風に考へます。私は、小さな時からさういふものを、よく解(わか)らなくてもいいから、読んでゐる間に心の中で育っていくといふやうな形でもいいから、与へるべきであるといふことを考へてゐます。

吉田　先生ご自身も四書五経(ししょごきょう)を、小さいときから習ってこられたわけですか。

石井　ええ。

吉田　論語とか儒教的な発想とかいふのは、このごろは大変悪くいはれてゐるわけですが、それも大事なものの一つだと思ふんですけれども……。

石井　私は儒教の精神の中には、今の世の中になくてはならない重要なものが勿論(もちろん)あると思ふんです。それは本当に読んでみさへすれば、よほど新しい人でも、ああこんなことを孔子(こうし)は言ってゐたのかといって、再認識してくれるだらうと思ふんです。さういふやうなものを小さな時からみんなで、持っていくべきぢゃないかと思ふのです。

吉田　ただ、やはり日本自身の中でいろいろ、儒教から入って来たものもあれば、仏教から入って来たものもあれば、ヨーロでハから来たものもある。それがどう一体化するのか、あまり不明瞭(ふめいれう)で、何が何だか解(わか)らないといふのも困るわけです。そこらへんのところが教育の基本問題の一つでせうね。しかし、いづれにしても、差しあたり読み書きといふのをきちんとやっていって、脱落者を出さないやうに、全部の人が読めるやうに、しかも楽しく読み書きがやれるやうにといふ、石井さんの独特のご発想でこれが実験によってやられてゐるし、実際やって効果があるといふ形で普及してゐる。

これはやはり日本の教育に一つの大きな提案をされてゐる問題だといふ風に考へるわけです。日本の敗戦以来、字をきちっとやることがまづ何より基本だといふお考へで進まれて来たことには、大変感心させられてゐるし、これからも大いに活躍していただきたいといふ風に思って居ります。どうも有難(ありがた)うございました。